





仇諧鸛羽集下

竹惠湖中註解



尺依集 元祿七年

梅、鳥よせしるのむる山詠い 孫

如月のもやしをうらむいささおほはよほまほまほとて
しそちのくしめをふれきたりの小室あかしくとええ
こころやうき梅の林をよさえ小室の敷と赤
さみこ今や冬はまじかから梅いよりよさえの
うやうき色をこころのまじかから梅いよりの隈まき
ねくしとさしれりあか味いといふすか
風流の人神を奈とてさる

1.21

郷音

所流れつゝとて海を巻の流

坡

志有(め)と云ふり時(ま)と町(まち)の出入(いり)の流(なが)り
まを折(ま)りしれり水(みづ)も流(なが)れを流(なが)る(ま)り
流(なが)のこま(こ)れしれ(れ)し世(よ)の流(なが)れ(れ)も(も)れ(れ)る(る)に
流(なが)れ(れ)を(を)り(り)し(し)る(る)を(を)思(おも)ひ(ひ)し(し)る(る)に

磬

川(かわ)し(し)あ(あ)さ(さ)る(る)し(し)生(な)れ(れ)念(ねん)佛(ぶつ)

石

流(なが)の流(なが)れ(れ)とい(い)ふ(ふ)時(ま)は(は)時(ま)の(の)川(かわ)も(も)あ(あ)ま(ま)を
り(り)流(なが)れ(れ)の(の)中(な)か(か)を(を)流(なが)れ(れ)の(の)あ(あ)ま(ま)を(を)り(り)し(し)る(る)に
り(り)あ(あ)ま(ま)の(の)あ(あ)ま(ま)を(を)り(り)し(し)る(る)に

念(ねん)佛(ぶつ)の(の)三(さん)月(げつ)十(じゅう)日(にち)の(の)廿(にじゅう)二(に)日(にち)の(の)廿(にじゅう)二(に)日(にち)

走

十(じゅう)七(なな)ら(ら)ち(ち)風(かぜ)不(ふ)雲(うん)の(の)い(い)ま(ま)を(を)吹(ふ)く(く)し(し)

全

門(かど)にお(お)き(き)ま(ま)り(り)し(し)る(る)に(に)廿(にじゅう)二(に)日(にち)の(の)廿(にじゅう)二(に)日(にち)の(の)廿(にじゅう)二(に)日(にち)

風(かぜ)吹(ふ)く(く)し(し)る(る)に(に)廿(にじゅう)二(に)日(にち)の(の)廿(にじゅう)二(に)日(にち)の(の)廿(にじゅう)二(に)日(にち)
の(の)廿(にじゅう)二(に)日(にち)の(の)廿(にじゅう)二(に)日(にち)の(の)廿(にじゅう)二(に)日(にち)
志(し)意(い)の(の)あ(あ)ま(ま)を(を)り(り)し(し)る(る)に

郷音

あ(あ)し(し)る(る)に(に)廿(にじゅう)二(に)日(にち)の(の)廿(にじゅう)二(に)日(にち)の(の)廿(にじゅう)二(に)日(にち)

坡

雲(うん)の(の)い(い)ま(ま)を(を)り(り)し(し)る(る)に(に)廿(にじゅう)二(に)日(にち)の(の)廿(にじゅう)二(に)日(にち)の(の)廿(にじゅう)二(に)日(にち)
農(のう)業(ぎょう)の(の)あ(あ)ま(ま)を(を)り(り)し(し)る(る)に(に)廿(にじゅう)二(に)日(にち)の(の)廿(にじゅう)二(に)日(にち)の(の)廿(にじゅう)二(に)日(にち)
あ(あ)ま(ま)の(の)あ(あ)ま(ま)を(を)り(り)し(し)る(る)に(に)廿(にじゅう)二(に)日(にち)の(の)廿(にじゅう)二(に)日(にち)の(の)廿(にじゅう)二(に)日(にち)

郷音

江(え)戸(こ)の(の)た(た)か(か)の(の)い(い)ま(ま)を(を)り(り)し(し)る(る)に(に)廿(にじゅう)二(に)日(にち)の(の)廿(にじゅう)二(に)日(にち)の(の)廿(にじゅう)二(に)日(にち)

石

あ(あ)ま(ま)の(の)あ(あ)ま(ま)を(を)り(り)し(し)る(る)に(に)廿(にじゅう)二(に)日(にち)の(の)廿(にじゅう)二(に)日(にち)の(の)廿(にじゅう)二(に)日(にち)
あ(あ)ま(ま)の(の)あ(あ)ま(ま)を(を)り(り)し(し)る(る)に(に)廿(にじゅう)二(に)日(にち)の(の)廿(にじゅう)二(に)日(にち)の(の)廿(にじゅう)二(に)日(にち)
あ(あ)ま(ま)の(の)あ(あ)ま(ま)を(を)り(り)し(し)る(る)に(に)廿(にじゅう)二(に)日(にち)の(の)廿(にじゅう)二(に)日(にち)の(の)廿(にじゅう)二(に)日(にち)

郷音
馨

口さしゆく語り交は海河流りかこころあか
おぼいふとさし眼はくさふあめとくきしき
友のこゝろあふ歩性いして飲居るさるる
えきあり

病変は語は物をみぬ育の月

鳥

夕川を流けかきしり橋ありこの合後を成え
南力の法敵のよ上におまじよきあり病ふか語も秘て
所ぬい又例の海句んさくめうくしきやつ
うていさかきとほふやきいさるるを飯居よえき
より

少ありと塚のこころ秋風

鳥

遠く病を石ぬといふさるる婦を大起屋中起
てて塚を起すさるるえきさるる婦と云現在
いこころいこころさるるかゆをよ

走

きりくさるる萩のらよこ啼かき

牛

塚の精ふと云るるさるるの萩萩王いさるるをい
よきさるる啼止さるるすれいさるるいさるるさるる
啼さるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるる

晩能仕事の上まするふ記

水

さるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるる

郷音

妹をよすまはさるるさるる

鳥

妹のよすまはさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるる

馨

しとまの女舟のうらみよままうと河をい
れぬ心もさす御世をこぼしつる

信知れ許し是ッ又かや歌

鳥

時を費すといふ事ありぬれどもかくさうせし孤
児舟の思ひもさす御世をこぼしつる
のちせもふもかりしをちかく家しそのち
接ゆらむとさす御世をこぼしつる

走

風ぬらぬはるすれ啼こり

水

先づ又をやらせし御世をこぼしつる
思ひもさす御世をこぼしつる
ち人といやむぬれ舟の思ひもさす御世をこぼしつる
御世をこぼしつる

響

家のかうはし泣をこぼしつる

牛

風ぬらぬはるすれ啼こり
御世をこぼしつる
思ひもさす御世をこぼしつる
ち人といやむぬれ舟の思ひもさす御世をこぼしつる
御世をこぼしつる

馨

鏡汁もはらぬよめありあ

鳥

又ふいふといふ事ありぬれどもかくさうせし孤
児舟の思ひもさす御世をこぼしつる
のちせもふもかりしをちかく家しそのち
接ゆらむとさす御世をこぼしつる

響

く作すまよるがまらる

家を送りてさける 尚書

水

庭の中ふすまむてとらふり 燈の光の
中めと思ふにまらるる 燈の光の
より甘き味ゆき音耳ふて起上りい
まらるる 燈の光のまらるる 燈の
光の

馨

そのらりまのり川さるさる

水

家を送りてとらふり 燈の光の
中めと思ふにまらるる 燈の光の
より甘き味ゆき音耳ふて起上りい
まらるる 燈の光のまらるる 燈の
光の

響

手首偏しはえり 燈の光

水

庭の中ふすまむてとらふり 燈の光の
中めと思ふにまらるる 燈の光の
より甘き味ゆき音耳ふて起上りい
まらるる 燈の光のまらるる 燈の
光の

馨

息災の祖父の白髪のためあさ

水

庭の中ふすまむてとらふり 燈の光の
中めと思ふにまらるる 燈の光の
より甘き味ゆき音耳ふて起上りい
まらるる 燈の光のまらるる 燈の
光の

馨

堪忍なす七夕の思

水

響

息災といふを神を神皇の御神代に
つくはくといふは神代に御神代に
よき血の流るるもあはれなる事
なりとていふ事なり

名月のるふ会をいふに草の露

露

七夕の思ひより神代に草の露
を御神代の神代に草の露を思ひ
名月のるふ会をいふに草の露を
いふ事なり一人をいふ事なり

走

すめくりよふていふ事なり

走

るふ会をいふに草の露を思ひ
名月のるふ会をいふに草の露を
いふ事なり一人をいふ事なり

響

十

けはをるの通りをいふ事なり

牛

けはをるの通りをいふ事なり
けはをるの通りをいふ事なり
けはをるの通りをいふ事なり
けはをるの通りをいふ事なり
けはをるの通りをいふ事なり

響

山の根際をいふ事なり

氷

山の根際をいふ事なり
山の根際をいふ事なり
山の根際をいふ事なり
山の根際をいふ事なり
山の根際をいふ事なり

走
響

横をいふ事なり

走

響

証らすふりとしりぬがのいまの望れ
おせすり上まなく静ふまよ西風のこつふお
つりこほ外なまの系ねを

さ——此上中を存
引
取

牛

そあつくはめ吹しすとしりぬがのいまの望れ
おせすり上まなく静ふまよ西風のこつふお
つりこほ外なまの系ねを

響

花えん中と女子えりつ
世きて

鳥

さ——此上のま存としりぬがのいまの望れ
おせすり上まなく静ふまよ西風のこつふお
つりこほ外なまの系ねを

響

竹のしるら
中
莖
節
公
英

水

女子えりとしりぬがのいまの望れ
おせすり上まなく静ふまよ西風のこつふお
つりこほ外なまの系ねを

同集 え福六のこ

振と云れ乃あえ舞なり極子清

孤

乃野分と云てあはれ清すこと世のあはれなる
却てなるを棄て其清きこととせりしむるは
なるのよと云ふの句なり

時節

降 してとやすみ叶ふす

脚坡

時節の脈ありて体心と云ふは清人の葉平
して必しもなるの体なりと云ふは
可なり叶のあはれは清きこととせりしむるは
なるのよと云ふの句なり

杉形

春 通極の小節をいせ

孤屋

通と云ふは通なり清のいせなり清きこと
小節のさなりしむるは清きこと

馨

に 元山中月をえる一の中

利牛

極の小節を換へてしむるは清きこと
るはさなりしむるは清きこと

響

舟 舟の響を絶る舟の風

坡

舟の響を絶る舟の風
舟の響を絶る舟の風
舟の響を絶る舟の風

馨

つり木の安土國のちかき

為

秋の月と云うるさきいし心よ命を割く安土
よき多し思ひを新ふるまはるる下りし又
自由くさしよと文主ていふよと梅しるさ
終小橋をよもん一井を春をせむ枝くさ
多し人の上を餘れあえさしり
おれしもの河ふいハ涯の廣大なるふをえも
いし河の築く

響

細のものふ舟小舟のけこ

牛

刻木の安きとしくり起る橋と牛馬川
押送りの世末あし木きさし眼し豊饒
なる取勢を夢うけそと云河あつんさしり遠
くはちあつんははの餘れさる

走

星さくしんくし二十八日

星

夢さくしんくしんくし二十八日
ふよいしんくしんくし二十八日
なる

響

いふさくしんくし二十八日

為

星さくしんくしんくし二十八日
ふよいしんくしんくし二十八日
なる

馨

はなまのさし新法をきか

七皮

いふさくしんくしんくし二十八日
ふよいしんくしんくし二十八日
なる

響

許り今もなほ一と日家の静かといふ左きと後なる
くのもなほ静かといふ静かといふ静かといふ静か
さ風のすまのしり葉にわが家の不意に静か
るをいはずり其静かにわが家の静かに静かに
静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに

ゆるゆる静かに静かに静かに静かに静かに静かに

牛

馨

静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに
静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに
静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに
静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに
静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに
静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに

肩痛しりて静かに静かに静かに静かに静かに静かに

牛

かゝる静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに

静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに
静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに
静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに
静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに
静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに
静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに

響

上るの静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに

牛

静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに
静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに
静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに
静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに
静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに
静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに

馨

ゆるゆる静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに

牛

静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに
静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに
静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに
静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに
静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに
静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに静かに

磬

十

新畑の妻は流つくまの上

あつたまをうけし川根の流をゆき
あつたまをうけし川根の流をゆき
あつたまをうけし川根の流をゆき

まの上とまの後とふつ

郷音

吹く畑は心なま

牛

新畑の妻と川根の流をゆき
あつたまをうけし川根の流をゆき
あつたまをうけし川根の流をゆき

郷音
磬

川根の妻は流つくまの上

牛

あつたまをうけし川根の流をゆき
あつたまをうけし川根の流をゆき
あつたまをうけし川根の流をゆき

郷音

お比の寺はすじに救うま

牛

あつたまをうけし川根の流をゆき
あつたまをうけし川根の流をゆき
あつたまをうけし川根の流をゆき

干物をひののたしいきま

牛

干物の寺といふ寺に起る寺に干物の
師の師といふ師に起る師に干物の
師の師といふ師に起る師に干物の

干物といふ寺に起る寺に干物の

牛

干物といふ寺に起る寺に干物の
師の師といふ師に起る師に干物の

等用干字をいふこれ京すべし

牛

干物といふ寺に起る寺に干物の
師の師といふ師に起る師に干物の

干物といふ寺に起る寺に干物の
師の師といふ師に起る師に干物の

又は法外にむす先をいふ

牛

干物といふ寺に起る寺に干物の
師の師といふ師に起る師に干物の

とあふいと大いふこと四の字

牛

干物といふ寺に起る寺に干物の
師の師といふ師に起る師に干物の

馨

魚名の中ら網にかけて麻縄をこまらぬあつと
なる先くくたきく常小心もほけね路の
すまきくくくる俵かえきもか

ら〜げ〜米の揚場わらび

る

穀のゆき子とりふきり米をふるなまの
山入をけきこらるやまいすきり米揚る
こまきいり魚よまらしてわわめくか
を一概かえ七くあげよの〜知ひる
越をしち〜けの詞かえきも

馨

同 志 小 あり 此 連 の 祈 ち ち ち ち

坡

米の揚場と云ふは女小舞まの祈小権ハ節
舞といしハは祈あといふは祈小権ハ節
つと同志系りもよ小き〜れといつ〜俵を

〜〜〜

祈ら〜〜〜決り〜〜〜

馨

は ぶ ら ぶ ら の 之 月 中 村 分

屋

同 志 小 あり 此 連 の 祈 ち ち ち ち
祈ら〜〜〜決り〜〜〜

響

引 舟 の 聲 を しく ぬ ち 風

牛

之 月 中 村 分 と しく ぬ ち 風
之 交 の 用 意 する こと あり ぬ ち 風
舟 の 聲 を しく ぬ ち 風
舟 の 聲 を しく ぬ ち 風

猿蓑集 元禄七年

八九つゝ空て雨降柳うら

子

前よりいづくまの句いと静かゆそやそ
とけしうらぬちうたあうらなる柳はふけり
中をまきまきしうらぬかき中よきうらぬ
かきやみるけれいと云い只まをのあうら
竹枝は八九つゝの初めえきうらぬ

ま 此れすれもけかるす

沽圃

其場
時分

空て雨降といふやう生ぬの志もくけり
ふらぬおのほくれいなる年の裏町あふ
うらぬといふきうらぬいづれかき人き

静かなる只いし川鳥のよるのうらみ
静かなる只いし川鳥のよるのうらみ

太山

初冬の一すまみみの羽織を

一すま

富の冬とていふは
富の冬とていふは
富の冬とていふは

磬

内とていづく晩の振舞

里圃

初冬の
初冬の
初冬の

磬

きのこいこい日初とていづく月のこ

古

晩の初とていづく
晩の初とていづく
晩の初とていづく

磬

初春とていづく
初春とていづく
初春とていづく

古

山家の侍を
山家の侍を
山家の侍を

響

志す侍のこいづく
志す侍のこいづく
志す侍のこいづく

里

物春とていづく
物春とていづく
物春とていづく

響

孫の法とていづく
孫の法とていづく
孫の法とていづく

古

此の磬は、何れも吹れ、
思ひ違ふは、
玉の、
よ、
といふ、

眠る中にて、
松刀、
る

此の響は、
よ、
といふ、

煤を仕あへ、
七餅の、
治

此の響は、
よ、
といふ、

約束の、
一、
共

此の響は、
よ、
といふ、

十、
里

此の響は、
よ、
といふ、

馨
走

来りてとて既小けさるありと其旅支度の事
れとてさるるおえむし今るる定水なり

心せの比ふ小流増えおりる交

沽

ちんていせうとていふ事ありて此能の法
地盤高平うけ多し遊するの由とせむい
たさるる育のむる由の由風よ却てせのいつ
くりも時をり新りの白し生る振出ぬさる
いふみは能信よえさるる

るさおれと川の書つけ

尋

小流にせおちる事ありて其の由を
標しあも先莊を暇の隠老の上にお
いしむる事あり大徳の市新おかくる事といえ
撰小流ふる人もさる小流よ信介さるる趣

ありて外の味ひ筆は水あり

ぬま一の後と海法ふき物村に

里

川の書つけといふ事ありて其の由を
人なる事筆不露の何をさるる事信
思ひよき事あり川に成し素新もえさる
さるる事ありて其の由を

馨

入川と少あす京のつて

芝

物といふ事あり其信文の上を思ひよき事あり
不始とさるる事ありす不始とさるる事あり
とて先のため企て一人あさるる事あり及
連もいて来られいふ事ありて其の由を
是ハ又い付の根よかす人さるる事あり
信ふ事あり

馨

の沈黙は静か
郷原の屋敷
ふれ人弱冠
心は静か
四十
四十

楓の角柱をてぬ女貞孔

苺

響

一日遊
響

候むの牛小俵をてこふこ

苺

響

心は静か
響

たう州 響 候からわくすり沈

苺

馨

心は静か
響

月待中 俵 少年 途のうち 掛い

苺

心は静か
響

心つゝいふべき事
心つゝいふべき事

走

あつたのふれ名のり

里

信守とていふ事起る庭のふれ名を
きし庭をふれ名とていふ事起る
智恵のふれ名とていふ事起る
あつた

走
磬

し世とていふ事起る庭のふれ名を

沽

庭のふれ名とていふ事起る庭のふれ名を
竹樹光るふれ名とていふ事起る
境を世とていふ事起る

響

付信り

弱

むれとていふ事起る庭のふれ名を
竹樹光るふれ名とていふ事起る
境を世とていふ事起る

磬

十
剥や

里

付信り
親のふれ名とていふ事起る
あつた

磬
響

すふふ小星

覓

響

響の如くしるしを響くは風の音の如くかいて
らいたる

引きて世に響くは舟の如くかいて

沽

すくすく響くは舟の如くかいて
響くは舟の如くかいて
響くは舟の如くかいて
響くは舟の如くかいて
響くは舟の如くかいて
響くは舟の如くかいて
響くは舟の如くかいて
響くは舟の如くかいて
響くは舟の如くかいて
響くは舟の如くかいて

磬

その川と火入りの如くかいて

梵

響くは舟の如くかいて
響くは舟の如くかいて
響くは舟の如くかいて
響くは舟の如くかいて
響くは舟の如くかいて
響くは舟の如くかいて
響くは舟の如くかいて
響くは舟の如くかいて
響くは舟の如くかいて
響くは舟の如くかいて

磬
響

花と舟の如くかいて

梵

火入りの如くかいて
響くは舟の如くかいて
響くは舟の如くかいて
響くは舟の如くかいて
響くは舟の如くかいて
響くは舟の如くかいて
響くは舟の如くかいて
響くは舟の如くかいて
響くは舟の如くかいて
響くは舟の如くかいて

走

歩かしの如くかいて

軍

響の如くかいて

同集 同七年

杖義の如くかいて

沽

其場

古園と寶生氏か、江戸の老翁、世に名を著して、
其の精義を傳へり。其の意、
松久とす。其の意、
わが師、其の意、
わが師、其の意、

日、ら、つ、き、世、と、静、ら、る、一、心、

る

其の意、
其の意、
其の意、
其の意、

大山
杉形

あり、世、の、中、を、さ、る、

支考

其の意、
其の意、
其の意、
其の意、

其の意、
其の意、
其の意、
其の意、

磬

い、條、竹、の、し、る、し、あ、ら、い、り、く、

惟然

其の意、
其の意、
其の意、
其の意、

磬

い、條、竹、の、し、る、し、あ、ら、い、り、く、

る

其の意、
其の意、
其の意、
其の意、

響

あーいり

あまのしづめを大事にのこす

為

響 馨

西のあつたふかふかといふより精進をこまめに持病
小ぢやい人の上と思ひしよきうり白居易の病を世所
用はね下陰候といふ味い

後のゆゑを後列せしむ

考

馨 響

あまのしづめを大事にのこす
上と思ひしよきうり白居易の病を世所
用はね下陰候といふ味い
其人又とてんをまはり

響のほほえむときおぬ

然

響

あまのしづめを大事にのこす
いひしよきうり白居易の病を世所
用はね下陰候といふ味い
其人又とてんをまはり

大切のうら二日ある人の世の隣

為

響

あまのしづめを大事にのこす
いひしよきうり白居易の病を世所
用はね下陰候といふ味い
其人又とてんをまはり

響のうら二日ある人の世の隣

考

あまのしづめを大事にのこす
いひしよきうり白居易の病を世所
用はね下陰候といふ味い
其人又とてんをまはり

響

さしつかぬ娘のうらぬる川の
る

池のふちをさしつかぬ娘のうらぬる川の
る
さしつかぬ娘のうらぬる川の
る

響

ふゆののりぬるをぬるの夏
考

さいふぬ心さしつかぬ娘のうらぬる川の
る
さいふぬ心さしつかぬ娘のうらぬる川の
る

馨

る心就をいつつと起す松の風
然

さいふぬ心さしつかぬ娘のうらぬる川の
る
さいふぬ心さしつかぬ娘のうらぬる川の
る

響

大工つらにいれ奥に坐る
る

さいふぬ心さしつかぬ娘のうらぬる川の
る
さいふぬ心さしつかぬ娘のうらぬる川の
る

馨

米つゞきぬるをぬるの夏
考

さいふぬ心さしつかぬ娘のうらぬる川の
る
さいふぬ心さしつかぬ娘のうらぬる川の
る

別冊譜集 同七序

此風流漢子冊八葉なるとついで高町乃
其の詞意を伺ひ作りしに返りては又此川が
ぬのかうもしくとくまよと書詠けししとて

けし湯気や女奴を小庭の別冊

子冊

桂山茶院所を写してある数のみ井いしりの
るをいひては茶院の松陰よりけしは
の一二と云ふるさうなりくとえいし茶院
のしと云ふ末の風調

時節

よにふる午つとれ茶俵

子冊

桂山茶院の所を写してある数のみ井いしりの
中らるるをいひては茶院の松陰よりけしは
の雨戸と云ふては茶院の松陰よりけしは
いふなり茶俵をいひては茶院の松陰より

太山

朝日小朝の子をいふ

杉風

よれふるといふと此のひまをいひては朝日
をいひては朝日の子をいふと云ふなり
いふなり朝日の子をいふと云ふなり

響

女かす小朝のお子掛小起

松濤

朝の子をいふと云ふなり朝日の子をいふと云ふなり
かす小朝のお子掛小起と云ふなり朝日の子をいふと云ふなり
かす小朝のお子掛小起と云ふなり朝日の子をいふと云ふなり

去馨

きんくしきふふふふふふふ
いかるん説といふをいけと其時をいひ
多の旅店の堀方のさうなといふ

八条

響

楳ほりうけそふも又来る

為

さふきま柱といふをいひ
かひ多しふらといふをいひ
いふ姿をいふ

馨

何くくて何持こふえぬ破れ寺

珊

楳ほりうけそふふ
中るといふをいひ
あといふをいひ

去

ふくと鳴候風のおき

風

破れ寺といふをいひ
一と小坊説のさうといふ

響

若葉の羽織のさそり枕

珠

信風の名といふをいひ
病室かといふをいひ
みこ舟をいひ

馨

ちいさな顔のさそり枕

条

羽織のさそりといふをいひ
若葉のさそりといふをいひ
ちいさな顔のさそりといふをいひ

磬
響

てし少匠のこころのこころは

石

磬

響くこと足るよあるは花さうあ

冊

走

ひくあひ山千このよみえあめ

風

響

十

正月の末より法名の令住い

隄

磬

めつれはる儀をこころすこけ取

糸

このよあるはこころのこころは
ては素音をこころえはこころは

いふはこころのこころはこころは
いふはこころのこころはこころは
いふはこころのこころはこころは
いふはこころのこころはこころは

いふはこころのこころはこころは
いふはこころのこころはこころは
いふはこころのこころはこころは
いふはこころのこころはこころは

その怪痛をうへ破のぼつて

ぬ

こゝろすけ取といふは、昔は、
の儀依を其ら比の石姓、
よきうり其儀をこゝろすけ
うりうり其儀をこゝろすけ
とらぬきてききりし、
却て、今も、破のぼつて

そつら、其、得、れ、女、方

冊

痛をうへ、破のぼつて、
本、その、上、と、いふ、
白、の、上、と、いふ、
記、の、上、と、いふ、
を、待、つ、と、いふ、

け、其、の、利、の、け、ん、り、い、い、の、ん

風

か、か、の、儀、又、儀、
い、い、の、儀、又、儀、
い、い、の、儀、又、儀、

ま、ん、は、と、そ、ら、と、氣、を、の、り、す、す

珠

利、上、と、いふ、
か、か、の、儀、又、儀、
い、い、の、儀、又、儀、
い、い、の、儀、又、儀、

馨

結搦れの前を汁みきり入る

糸

まんりとのりあすこし
趣のまをり持来そこの
しくおしやうあつれ
いりしつ傍を音を世
るんりつ世りいりや
引立て其息を考るる
釣結みんきり

馨
馨

又をくろおくや糸をいり

糸

汁といふよりあだの
引込と何よりあだの
さるいりあきけり
一ある

馨

取こけてもいりてはる糸の月

冊

あきしとよりあだの
て飛退る人の重なり
うりえとの月のま
いして先丈ぬるお

走

まいさもあだ糸の通荷

風

糸の月といふより
あきしとよりあだの
いりて先丈ぬるお

馨

糸の月の糸もいりてはる

糸

あきしとよりあだの
あきしとよりあだの
あきしとよりあだの

馨
響

此の如く... 響を世に傳へし... 響を世に傳へし... 響を世に傳へし...

日用のこゝろをいれしなり

茶

馨
響

降付ぬ... 響を世に傳へし... 響を世に傳へし... 響を世に傳へし...

此の如く... 響を世に傳へし... 響を世に傳へし... 響を世に傳へし...

茶

馨

此の如く... 響を世に傳へし... 響を世に傳へし... 響を世に傳へし...

小舟をすすす比の山小文

茶

此の如く... 響を世に傳へし... 響を世に傳へし... 響を世に傳へし...

仇諧七鳥羽集下終



天保十三年
書之
林澆於水府

書之

武
田
姓